Alice story　~本当のアリスは誰？~

◇ダイヤ◆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｌｉｃｅ　ｓｔｏｒｙ　~ 本当のアリスは誰？~

【Ｎコード】
Ｎ２９９４Ｘ

【作者名】
◇ダイヤ◆

【あらすじ】
「君はアリスじゃないなら、何？」白ウサギの一言が、突き刺さった。　俺の名前は、なんだ？　『ワカラナイ』　自分の居場所がほしかった。ただ、それだけ。それだけで、俺はここにやって来た。
彼は本当のアリスだろうか。　彼の居場所は存在するのだろうか。
彼は何なのだろうか。

Where is the next Alice? 次のアリスはどこ?

Welcome, Alice!!!

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

不思議の国(ワンダーランド)は、アリスを待っている

アリスがいないと物語が進まない

1番目のアリスも、2番目のアリスも、3番番目のアリスも、4番目のアリスも5番目のアリスも――・・・

みんな途中で死んでしまった

本当のアリスにしか物語は終わらせられない

では、次のアリスは、物語を終わらせる事が出来るのでしょうか?

物語が終わった時、不思議の国(ワンダーランド)は、アリスは

どうなってしまうのでしょうか?

そもそも

物語の始まりとは、終わりとは

どこなのでしょうか？

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

「お呼びでしょうか。陛下。」

青年の声が響く。

大きな扉。高い天井。並ぶ兵士達。跪(ひざまず)く青年。そして、玉座に座る少女。

少女は優しく微笑み、青年に向かって口を開く。

「ええ。呼んだわ。帽子屋。」

「今日は一体なんのご用でしょうか？」

跪いたまま、青年…帽子屋は問う。陛下と呼んだ少女に向かって。

「白ウサギが動いたの。きっと、アリスが来たのよ」

一呼吸置き、陛下は微笑みを消さず、帽子屋の前に歩み寄った。

そして、帽子屋の顎(あご)をくいっと持ち上げ、囁(ささや)くように耳元で呟く。

「だから、アリスを――――――。」

言い終わると、陛下は帽子屋から離れて玉座に座った。

「承知しました。我が主。ハートの女王。」

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

「何なんだか、この馬鹿騒ぎは。」

人が混み合い、そして賑わっている。

そんな人の集まりの中、青年はいた。

耳に掛かる程度の金髪。淡い、青色の瞳。格好は、白いワイシャツ。ワイシャツの上には、黒いジャケット。下はジャケットと、セットとなっている長ズボン。なぜか、青年は異様に目立っている。誰一人として、青年を睨み付けている訳でも、見続けている訳でもない。ただ、青年は『何か』に見られている。誰も気づかないような、何か。

ここに、俺の居場所。あんのかな。

青年は、人混みを避けながら歩いている。と―

グイッ

「！！？」

突然腕を掴まれ、引っ張られていく。人混みを抜け、人が少ない通りへと引っ張り出された。

「人混みにいると、迷っちゃうよ？」

笑顔。青年を引っ張り出した、張本人である少女は探していた物

でも見つかったと言うかのような笑顔。
首に付く程度で、垂れ下がった白い銀髪。黄金色の瞳。幼さ残る顔立ちだ。格好は、白いジャケット。黒いワイシャツ。下は黒いショートパンツ。ショートパンツには、レイピアが垂れ下がっていた。ここまでは、普通と言っても、まぁ。通るだろう。でも、少女には変わっている事があった。美しい銀髪には、白いウサギの耳が立っている。偽者には見えない。不自然は無く、自然と少女の頭から生えている。
だが、そんな事は青年にとってどうでもよく、最初に出てくる言葉は、
「誰だよ、あんた。」
「僕は白ウサギさ」

少女…白ウサギは青年の片手を取り、言葉の続きを言い放つ。
「不思議の国へようこそ。アリス」

―アリス―

白ウサギの言葉に反応し、手を振り払う青年。強く白ウサギを睨みつける。その様子が、不思議だと言わんだかりに白ウサギは首を傾げた。ウサギの耳が揺れる。
「俺はアリスなんて名前じゃない。」
目を丸くし、白ウサギは青年に顔を近づける。一瞬、退いた青年だったが、白ウサギはそれを許さないとばかりに顔をさらに近づけてきた。
「君はアリスじゃないなら、何？」

黄金色の白ウサギの瞳に、青年の姿が映る。

俺の、名前？

名前？

俺の名前は・・・

俺の・・・名前・・・

俺の、名前はなんだ？

アリスが好きなのでアリス系を書いてみました！
はい！
下手くそですね！話めちゃめちゃですね！
すみません。
アドバイス・感想をくれると、飛び跳ねて喜んじゃいます！
これからは、一週間で、最低一回は投稿するように頑張ります！
ここまで読んでくださった方。
ありがとうございました！

Alice and the Mad Hatter and White R

こんにちは！作者です！
これから、このスペースに、前回のあらすじみたいなものを書かせて頂きます！
もしかしたら、途中からあらすじではなく、キャラクターたちの会話になったりするかも・・・？
そこらへんは、見てくださっている皆様によります。と言っても、自分勝手に初めてしまうかもしれません；；
すみません。そこは、ご了承ください。
では、あらすじですね！

主人公（名前不明）は、不思議の国（ワンダーランド）へ来て、白ウサギに出会いました。
白ウサギは主人公を『アリス』と呼ぶ。主人公は自分はアリスじゃないと否定するが、白ウサギに『君はアリスじゃ無いなら、何？』と言われてしまう。
アリスでは無いなら？自分は何だ？
白ウサギの言葉を否定しようにも、自分の名前が判らない。自分が何なのかも判らない。
俺の、名前はなんだ・・・？

こんな感じでいいんでしょうか？あらすじはもっとこうした方がいい。などのアドバイスをくださると、嬉しいです！
はい。
長々（？）とすみません。ちゃっちゃっと話かけぇ！！！とか、思われていそうです；；
では、この辺で、作者のどうでもいいあらすじは終わりです。
失礼しました。

「俺、は・・・」

言葉に詰まった青年を無視し、白ウサギは何、と続ける。
唇を噛み締め、青年は俯く。

産まれた時に、貰ったものじゃないのか？

でも、名前を、俺は――――・・・

沈黙が続き、青年の額からは汗が流れた。すると、白ウサギが少女らしく、クスッと小さく笑った。顔を青年から遠ざけ、笑顔で青年を見つめる。
意味がわからない青年は、首を傾げた。

「やっぱり。君はアリスだね。」

俺はアリスでは無いと、もう否定は出来ない。だから、青年は自分が多分アリスだと言う事にしておいた。
「ああ・・・。判った。俺は、多分アリスだ。それで、いいだろ？」
「うん、別にいいよ。」

あっさりと了解し、白ウサギはくるりと一回転して見せた。抑えきれない喜びを、さらけ出すかのように。

「じゃあ、アリスの行きたい場所へ連れてってあげる。僕は、案内役だからね」
「俺の行きたい場所、ねぇ。」

初めて来た場所で、行きたい場所も何も、判らない。ここが、どこなのかも判っていないのだから。
悩(なや)み始めたアリスの様子を楽しむかのように、白ウサギはニコニコと笑っている。と―

「お前の役目はそこまでだろう？白ウサギ」

黒く、艶(つや)のある拳銃(けんじゅう)が、白ウサギの頭に突き付けられた。
「っ！？」

自分がやられている訳では無いが、さすがに目の前で拳銃(けんじゅう)を突(つ)き付けられている奴(やつ)がいれば、動揺(どうよう)する事だろう。アリスは、動揺(どうよう)していた。
それでも、白ウサギは動揺(どうよう)せずに、顔だけを動かして拳銃(けんじゅう)を突き付けた人物を笑顔で見た。
耳に掛かる程度で、うねうねと癖(くせ)が付いた黒髪。鋭く光る銀色の瞳。顔立ちと背丈で、アリスより年上なのが判る。だが、まだおじさんと言う訳ではなさそうだ。２０代半ばと言ったところだろう。格好は、全身黒いスーツと言うシンプルな服。そして、黒いシルクハット。全体的に怪しい雰囲気だが、ここでは不思議ではない。

「こんにちは。」
「アリスを渡せ。これは、女王命令だ。」
「そっか。それは、残念。ごめんね、アリス。僕は、女王様に嫌われてるんだ。だから、一緒に行けないの。帽子屋(ぼうしや)さんと一緒に女王様のところに行ってね」
拳銃(けんじゅう)を突き付けていた張本人の青年は、拳銃(けんじゅう)をしまい、強く白ウサギを睨(にら)み付けた。

「それじゃあ、またね。アリス」

白ウサギはアリスに手を振って大きく跳躍をし、家の屋根の上に飛び乗った。そして、もう一度笑顔を見せ、屋根から屋根へと跳躍しながら去って行った。

そんな白ウサギに向かって苛立ちを隠さず、帽子屋は見えなくなるまで睨み付けていた。

「あんた、誰だよ。」

「さっき白ウサギが言ってただろ？帽子屋だ。俺は、お前を女王の下へ連れて行く。それが、女王命令だからな」

「はぁ！？なんで、俺が連れて行かれなきゃなんねーんだよ」

青年…帽子屋は舌打ちをした。

「俺に質問をするな。黙って付いて来い。もし、お前が抵抗すると言うなら、無理矢理にでも連れて行く。それだけだ。」

帽子屋は、自分の言いたい事だけ言うと、さっさと歩き始めた。先ほどの言葉は恐らく脅しなどでは無いだろう。なぜか、そう思ったアリスは黙って帽子屋に付いて行く事にした。

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

『アリス・・・』

『早く、早く』

『迎(むか)えに来て・・・』

『私を、早く助けて・・・』

『じゃないと』

『　　』

『アリス・・・』

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

「チェシャ猫。いいの？」

「何が？」

森林の中。チェシャ猫と呼ばれた少年に近い青年と、少年がいた。

「ご主人様のところに行かなくて」

「いいんだよ。俺は、自由に生きたいから」

リンッ

鈴の音が鳴った。か細い鈴の音が。

それに合わせる様に、チェシャ猫はニヤリと笑う。

「それに、アリスも来たしね。これほど面白い事は無いよ。」
「アリスをいじめるのもほどほどにな。何十人お前の、いじめでアリスが死んだ事か。」
少年は、呆れたように肩を竦(すく)める。
「知るかよ。そんなもん、前のアリスが弱かっただけだろ？それに、」
一呼吸置き、口を開く。
「アリスをいじめるのは、楽しくてたまらない」

な、何か一話目に比べて、さらに下手くそになってしまった！？
とか、かいている内に思いました。
だ、大丈夫ですかね？？？
内心、かなり焦っています；；；。
えーっと、感想・アドバイス大募集！
どんな事でもオッケーです！とにかく感想・アドバイスをください！
な、何か宣伝みたいですね；；
前書きに続き、作者のおかしな言葉ですいません。
では、この辺で失礼します。

Command from the Queen 女王からの命令（前書き）

こんにちは～
やっと3話目突入ですw
亀以上にとろい。とか、思ってる方。すいません。
なるべく、早く書きます！
では、あらすじです。

主人公は、自分をアリスだと言う事にした。自分には、アリス以外の名が無いから。（↑小説に書いていない事が入ってるよ！）そして、帽子屋と言う男が現れアリスは帽子屋と共にどこか、へ向かう事になる。アリスが向かう場所とは？

はい！アリスが向かう場所なんて、予想がつく人は付きますねw
すみません。
では、この辺で失礼します。

Command from the Queen 女王からの命令

「なぁ、俺達はどこに向かってるんだ？」
「俺に質問をするなと言ったはずだが」

ムカつく奴だな、おい。

アリスは帽子屋（ぼうしや）に苛立（いらだ）ちつつも、ちゃんと付いて行った。
どこに行くかは判らない。だが、もしも抵抗（ていこう）すれば拳銃（けんじゅう）を向けてくるだろう。自然的に思った事だが、今は自分しか信じられない。
取り合えず、おとなしくしておいた方が良いだろう。

「一つ聞くが、お前は自分の名前ぐらい名乗れるな？」
「はぁ？んなの、当たり前だろ」
「ならいい」

なんなんだよ、こいつは・・・。

おかしな質問をしてきた帽子屋を不思議に思いながら、それを口にはせず、また黙って歩く。
どこか、へ。

＊◇＊◆＊◇＊◆＊◇＊◆＊

アリスが連れてこられた場所。それは、

城、だった。

高い天井。飾られた壁。長い道にしかれたレッドカーペット。その先には、祭壇のように少し階段となって上がっている。そこに、赤い皮の玉座が一つ。さらに後ろの壁は大きな窓となっている。全体的に見て、まさに城の一部。

「始めに名前を聞かせてもらいましょう。」

玉座。そこには、少女が座っている。その横には、軍服を着た青年がきおつけをして立っていた。見た限りでは、護衛だろう。

肩にぎりぎり付かない程度のふんわりと雲のように内側にはねた黒髪。薄い赤色の瞳。顔立ちから見ても、可愛らしい人形のような少女。格好は赤いドレス。ドレスの裾は赤と黒のダイヤ柄。半袖の提灯袖は、黒色。手には黒いレースの手袋をしている。頭にはちょこんと、小さな王冠。全体的に派手で、豪華な格好だ。

女王様、ねぇ。こんな子供が。

内心では、目の前に座る少女が女王だとは信じがたい。

アリスは、帽子屋に連れてこられ、不思議の国（ワンダーランド）の女王の前に跪（ひざまず）いている。

「・・・。アリス、です」

仕方なく答え、アリスは女王を疑わしげに見つめる。

「始めまして、アリス。私は不思議の国（ワンダーランド）の女王。ハートの女王。それでは、本題に入りましょう」

優しい笑顔でアリスを見つめ、口を開く。

「アリス。私は、貴方に物語の不純物を殺してほしい。」
「は？不純物？殺す？。」

ぴんとこない。物語の不純物。それは、何の事だろうか。
跪(ひざまず)いたまま、アリスは色々と考えるが、答えは出ない。

「黒ウサギ。それが、不思議(ワンダー)の国(ランド)の不純物。物語が進まない理由(わけ)。それを、アリスに取り除いてほしいの。いえ。アリスにしか頼めないの。不思議(ワンダー)の国(ランド)では、勝手に人は殺せない。アリスを除いて。だから―」「ちょっ！待て！」

ハートの女王の隣(となり)にいた護衛が強くアリスを睨み付ける。
いつの間にか片手は腰に垂れている剣の柄(え)にあった。今にも剣を抜いて、襲い掛かってきそうだ。

「ダイヤ。アリスが怯えているわ。」

無言で護衛は剣の柄(え)から手を離し、きおつけの姿勢に戻った。

「俺にしか殺せない？どう言う意味・・・ですか。」
「不思議(ワンダー)の国(ランド)は、一つの物語。物語は決まった道を歩かなくてはいけない。だから、自分の役目を無視して勝手に人を殺す事は出来ない。だから、アリスだけしか殺せない。アリスがその役目を持っているから。」

俺の、役目・・・？存在理由・・・？

俺はただ、この世界の不純物(クロウサギ)を、殺すためにここへ来たって言うのか・・・？

この手を汚す為に、存在しているのか・・・？

違う。

俺、は・・・

俺は――――！！！

無我夢中（むがむちゅう）だった。

アリスは感情的になって、自分が何をしているのか判らなくなった。

気づけばハートの女王の首を両手で掴んでいた。そして、ダイヤには刃を首に突き付けられている。

「アリス。貴方の思っている事を話して？」

ハートの女王は首を掴まれているにも関わらず、微笑みを消さずにアリスの頬を撫でた。

「俺、は・・・。」

手の力が弱まり、その場に膝（ひざ）を付く。ダイヤは剣を収め、仁王立ちの状態に戻った。

「アリスから見れば、これは私達の自分勝手な考えね。でも、ここにはアリスの欲するものがあるわ。それを手に入れたいと願うなら、黒ウサギを殺すしか方法は無いのよ。」

俺の、欲するもの・・・？

俺は――――・・・

冷静を取り戻し、アリスはハートの女王の前に跪(ひざまず)いた。

「判りました。女王に従います・・・・。」

俺の欲するものは

絶対の居場所

Command from the Queen 女王からの命令（後書き）

もう、取り返しが付かないぐらい下手くそになっていると密かに思っています。
大丈夫かどうか不安です・・・。
でも、これからも書きます！誰も見ていなくても！
はい。変な事を書きました。すいません。
では、失礼します。

Location of the caterpillars ～芋虫の居場所

遅れました！あーだ、こーだ、パソコンがぁぁぁぁぁ！！！
と、なりまして・・・すみません＞＜
あらすじ←
アリスは、女王の命令を聞く事になり、不純物（クロウサギ）を殺す事になった。
自分の絶対の居場所を手に入れるため。アリスは黒ウサギを殺す。
そう、決めた。自分に言い聞かせ、アリスは黒ウサギを殺しに向かう・・・。

ねぇ、アリス。

可愛いアリス。

愛おしいアリス。

私だけのアリス。

ねぇ・・・

名前を頂戴？

『アリス。こっちへいらっしゃい』

誰かが俺に、話しかけてきた。俺は、コイツを知っている。そう、こいつは・・・

『姉さん・・・？』

『ふふっ。どうしたの、アリス？こっちへいらっしゃい』

自然と、体が動く。どうして？なんで？俺に疑問は生まれなかっ

た。ただ、無意識の内に、姉さんに手を握られていた。

暖かい・・・。

『ねぇ、アリス。先生が何を言っていたか覚えてる？』
『先生、が？』
『そう。先生は、奪い合いはよくないと言っていたのよ』
『奪い合い？何を？』
『・・・名前よ』
『名、前・・・？』

姉さん。何を言いたいんだ。
聞きたい。でも、聞きたくない。
聞いたら、俺の中の何かが壊れてしまいそうで・・・。

『アリス』
『っ！？』

突然、姉さんの手が、俺の手から首へと移動した。俺は、首を絞められている。
苦しい。痛い。どうして、こんな事をするんだ？
姉さん、姉さん、答えてくれ・・・。

『ねぇねぇ！アリスっ』
『姉、さ、ん・・・。や、めっ・・・』
『貴方の名前は本当にアリス？違うわよねっ！だってアリスは私だもの！貴方なんかじゃないのよっ！』

手に、力が込められる。
もう、声が出なかった・・・。

『・・・ねぇ、アリス・・・』

涙声で、ゆっくりと顔を耳元へ近づけてくる。

嫌だ。離せ。嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だっ！

『名前を・・・返して・・・？』

『離せぇぇぇぇぇ！！！！』

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

「うわあぁぁぁぁ！！！」

「やっとお目覚めか」

「・・・帽、子、屋・・・」

ベットの上。アリスは、汗だくの体を見て、自分が悪夢に魘されていたのだと気付いた。

何か、夢を見ていたのか・・・覚えてないけど。

目の前で、優雅にお茶を楽しむ帽子屋の姿がある。ここは、帽子屋の家。・・・地味だ。

赤の女王の命令を聞き、帽子屋と共の行動する破目になったアリス。帽子屋の家に着いた時は、疲労が体を襲い、睡魔によって眠っていたのだ。それで、今。となっている。

「悪夢でも見ていたのか？まぁ、俺には関係ないがな」

「うっせーな。ってか、今何時だ？」

「６時だ」

「俺そんなに眠ってたのか・・・って、真っ暗じゃねーかよっ！６

時な訳ねーし！」

窓から見えた、外の景色は夜の色。夜では無いかもしれないが、少なくとも夜明け前。６時はおかし過ぎる。

「俺の時間はいつでも６時だ。ほら、早く行くぞ」

「どこにだよ。女王のとこなんて言うなよ」

「黒ウサギを殺すんだろ？その為には、相手を探し出すだろ。このアホ」

「俺はアホじゃねぇ！」

アホと言う事に反論しつつも、頭を回転させる。

探し出す？どうやって？ってか、黒ウサギの居場所判ってなかったのか・・・。ま、当たり前か。

「で、その黒ウサギの居場所を探し出す為にどこに行くって？」

「芋虫の所だ」

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

暗い街は、とても不気味だ。

不思議の国（ワンダーランド）ならば、なお更、不気味。

昼間は馬鹿みたいに騒いでいたと言うのに、今は何の声もしない。

聞こえてくるのは、叩きつける様な風の音。

昼と夜で違いが凄すぎる。

相変わらず、おかしな国。

「あ、アリスと帽子屋さん」

そして、なぜか少女、白ウサギと出会ってしまう。

なんだ、これは・・・悪夢か？

白いウサギ耳が揺れる。何とも可愛らしい光景ではあるが、アリスにとっては興味が無い。帽子屋にとっては・・・うざい。

「どうしたの？こんな夜明け前に。あ、芋虫さんの所いくの？」
「五月蝿い、黙れ。チェシャ猫と三月ウサギの所へ行け」
「ひっどいなぁ。別に、いつもチェシャ猫と三月ウサギのとこにいる訳じゃ無いんだよ？それに、今はアリスがいるし・・・。アリスのとこの方が楽しいじゃん」

そりゃ、どうも。

白ウサギに言われても嬉しくは無い。決して嬉しくは無い。

「来るな。うざい。どこかへ行け」
「それは、帽子屋さんが決める事じゃ無いからね？あくまで、アリスが決める事だよ？」
「チッ・・・」

大きく舌打ちをした後、帽子屋は睨み付けるようにアリスを見やる。・・・どうやら、一緒に来るなと言えと言いたいのだろう。

帽子屋の好きにさせるもの嫌だな・・・。

「白ウサギ自身が決めれば、いい」
「やった」
「こんの・・・アホが・・・！」

帽子屋から殺気が出まくりなのは、気にせずに勝ち誇った笑みでアリスは帽子屋を見やる。帽子屋は本気で睨み付けている。・・・よほど白ウサギの事が嫌いなのだろう。

言った、はいいが・・・。こいつ等と一緒で大丈夫、か？

後悔が少し混じりつつも、アリスは気にし無い事にした。
ここでは、気にしていたら負けだろう、と言い聞かせながら。

バァンッ！

静かな夜。銃声が、響き渡った。

「そんなに怒らないでよ、帽子屋さん」
「クソウサギがっ」
「アハハハハハっ」

「いい加減やめろってんだ！！！」

芋虫の居場所へと向かい始めてからおよそ３０分。白ウサギと帽子屋はすぐに喧嘩を始めた。喧嘩のきっかけは、白ウサギが「帽子屋さんってアリスの事が好きなの？」と言う一言だった。・・・吐き気がする言葉だ。

当然、帽子屋の怒りは爆発し、今となっている。

こっちの身にもなれってんだ・・・！

自分自身の中で湧き上がってくる怒りを抑えながら、取り合えず喧嘩を止めようとするアリス。

「こんな調子じゃ芋虫のところに行けねーだろ！？」
「だってさぁ、帽子屋さんがぁ」
「言い訳無しだ！帽子屋も少しぐらい我慢しろ！」
「チッ・・・」

取り合えず、納まった・・・か。

だが、帽子屋は不機嫌な顔だし、白ウサギは変わらずに笑顔。アリスは・・・後悔。

これから上手くやっていけるのか・・・？

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

木々が生い茂った森の前。アリス、他2名はいた。

何の変哲も感じられない、森の前に。

「ちょっ・・・なんだ、ここ」

「どこって・・・勿論」

「「迷いの森」」

ああ、綺麗にハモったな。

まぁ、それは帽子屋にとって最悪なものであって・・・

「クソウサギが」

超不機嫌だ。

思いっきり帽子屋はアリスを睨んでいる。・・・なんで、許可したんだとでも言いたそうだ。

アリスは目を逸らし、なるべく帽子屋を見無い事にした。

「あー・・・で、迷いの森ってどんなとこだ？」

帽子屋の怒りからなるべく、避けるために必死に言葉を探した結果だ。

白ウサギは子供のように笑いながら・・・実際子供な気がするが、説明を始めた。

「迷いの森って言うのは、芋虫とかチェシャ猫とか三月ウサギとかの寝床ってとこかな。森の全体を把握しているのはチェシャ猫だけ。だから、多分チェシャ猫に案内してもらわないと・・・一生出られないかもって言う森」

笑いながらも、さらりと恐ろしい事を言う奴だ。

取り合えず、チェシャ猫がいなければ一生森の中に・・・と言うか死ぬ。

ヤバイんだな、うん。

「で、チェシャ猫はどこにいるんだ？見つけないと、俺達芋虫に会えねぇんだろ？」

「うん。一応知り合いだから、そこらへんは大丈夫だよ～。あ、でも帽子屋さんがチェシャ猫達の事嫌いなんだよね～」

「黙れ」

相変わらず、不機嫌な帽子屋。

アリスの口からため息は自然と漏れた。大きなため息が。と、刹那

「へぇ～。次のアリスは男か」

不意に声が聞こえた。

だが、周りに帽子屋、白ウサギ、アリス以外の気配は無い。本当に、声だけ。

アリスと帽子屋は厳しい表情になり、森を睨んだ。

「久しぶりだね、三月ウサギ」
「ああ・・・。久しぶりだね、白ウサギ。チェシャ猫が待ってるよ。アリスを・・・君達を。白ウサギなら場所、判ってるよね？じゃあ、俺は待ってるよ。チェシャ猫とね」

声は消えていった。気配は無かったのだが、なぜか消えたと判るような感覚が全身に過ぎった。
そして、なぜか白ウサギが珍しく難しい表情をしている。
悲しみ、怒り、苦しみ、そして・・・憎しみが混ざった表情。どうして、なぜ？

なぜ、そんな顔（ひょうじょう）をする？

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

「三月ウサギ、ちゃんとやってくれた？」

ぺろりと赤い舌を出し、青年…チェシャ猫は笑みを浮かべてみせた。狂った笑みを。
その横で木に持たれかかる青年…三月ウサギはやれやれと呆れた表情をする。

「ああ。言われた通りにしたさ。これで、満足だろ？」
「ありがと。本当はお迎えに行っても良かったけどさ、やっぱりアリス達自身の足で来てほしいんだよね～」

けらけらと笑うチェシャ猫の姿は、まるで壊れた人形。

壊れて

狂って
壊れて
狂って
壊れて
狂って

人形(ネット)。

もう、何も感じない操り(マリオ)

Invitation from Cheshire Cat ～チェシャ猫か

もう、駄目・・・です。眠いです。
馬鹿ですね～。こんな時間に書く私。
自分で笑っちゃいますよ。
あ、それと会話文が多い・・・。自分で気付いていても、治せない
ものなのです・・・。すみません。
では、眠いのでこの辺で。

Beginning of the game ～ゲームの始まり～（前書き）

←あらすじ

芋虫のいる迷いの森。迷いの森は、チェシャ猫しか全体を把握していない。その為に、チェシャ猫に力を借りなければならなくなってしまった。だが、そこでチェシャ猫からの招待があった。アリス、帽子屋、白ウサギの3人はチェシャ猫の下へと向かった。

Beginning of the game ～ゲームの始まり～

「あー・・・。ごめんね、アリス。突然変な事になっちゃった」

作り笑い。

白ウサギは無理に作り笑いをしている。

ドウシテ？

「嫌、別に・・・」

今の、白ウサギ（かのじょ）に何と声を掛けて良いのか判らない。言葉が、見つからない。

「・・・さっさと、行くぞ。馬鹿猫の所に」

「・・・うん」

あれ？帽子屋、今何か白ウサギを・・・。

「置いてくぞ、アリス」

「あ、ああ・・・」

迷いの森へと向かう2人を追いかける形で、アリスは森の中へと入っていった。

迷いの森へと・・・。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

昔誰かが教えてくれた。

『お前は、闇の中で生きていく』

どうして？

俺の質問に答える人間はいなかった。

判らない。

どうして他人に決められなくてはいけない？

どうして闇の中にいなくてはいけない？

どうして光の中にいられない？

『お前の存在が闇だ。闇そのものだ』

俺が、闇？

嘘だ。

だって

父さんは、笑って言った。

『お前は、明るい太陽のような子だ』

だって

母さんは、笑って言った。

『お前は、光のように温かいのよ』

誰か答えて。
父さんと母さんは間違っていたの？
それとも、

最初から嘘の言葉だったの？

ねぇ、ねぇ、ねぇ
誰か答えて。
判らないんだ。

助けて。

教えて。

誰か。

誰でもいいから・・・。

教えてよ。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

夜の月が映し出された透き通った薄青色の泉。直径１０ｍと言ったところだろうか。
そこにいたには、木の上で狂ったように笑う青年と、その下で呆れている青年。
薄紫の髪に金色の瞳。細身で筋肉質な体格。その体格がよく判る体にピッチリとフィットした黒い服を着ている。ノースリーブのＴ

シャツで、下はハーフパンツ。狂ったように笑いながらも、彼の美貌が引き出されている。何とも、人を超えた美貌を持つ青年だ。だが、青年には濃い紫色の猫耳と猫の尻尾がついていた。ウサギがいるのなら特に怪しくない。と言うか、馴染んでいる。

「アハハハハハハハハハハハハハハっアハハハっ」

笑い続けていた青年は、ふと笑うのを止め、木から下りてきた。そして、瞬きする暇も無く、青年は風のごとくアリス目の前へと来た。距離は１ｍと無いだろう。どうやったら一瞬・・・嫌、半瞬で約１０ｍの泉を渡ってこられるのか。不思議だ。

「今回のアリスは・・・変わってるな」
「はぁ？お前何言っ」「アリスから離れろ、馬鹿猫」

青年に突きつけられる黒い物体、拳銃。
一瞬、アリスが同様したが、青年は同様する事など無く、けらけらと笑う。・・・最初出会った白ウサギのように・・・。でも、何か違う。

「アハハハハハっ。帽子屋。君は何か勘違いをしてるんじゃない？ねぇ、白ウサギ？」
「なんだと？」
「・・・」

シュッ

風を切るよな音がした刹那、帽子屋の首にレイピアの刃が当てられた。冷たい、刃が。

「・・・何の真似だ。白ウサギ」
「ごめんね・・・」
「優しい帽子屋なら、きっと白ウサギを信頼してるって思ってたよ。口では否定しても、ね」

大きく舌打ちをし、帽子屋は拳銃を降ろした。白ウサギを睨みながら。
白ウサギは悲しい顔をしたまま、レイピアを帽子屋の首に当て続けた。

「白ウサギ・・・お前・・・」
「僕、は・・・」
「チェシャ猫。もう、白ウサギを苛めるのは止めたらどう？」

ずっと黙っていた青年が、口を開いた。
茶色の髪にオレンジ色の瞳。白いワイシャツにベージュのジャケット。下はジャケットと同じ、ベージュの長ズボン。はっきり言うと、地味な青年。それでも、青年には一つだけ地味では無い、茶色のウサギ耳がついていた。白ウサギに負けないなんとも可愛らしい耳。

「三月ウサギ・・・。チェッ、もう少しぐらい駄目？」

上目遣いで問いかける青年…チェシャ猫。
普通の人間（女子ならなお更）ならおちるだろう。色々な意味で。

「駄目」
「ケチ」
「ケチで結構。さぁ、白ウサギ。来いよ」

青年…三月ウサギは、白ウサギに手を差し出す。

「うん」

レイピアを収め、差し出された手を躊躇(ためら)いながらも、白ウサギは手を取った。

「アハハっ。おかえり、白ウサギ。あ、違ったね。俺が無理矢理」

「チェシャ猫」

三月ウサギは睨みながら、チェシャ猫の言葉を切った。それ以上は言うなと目で言っているようだ。

だが、チェシャ猫がそんな事を一々気にするなんて事は無く、へらへらと笑っている。

「はいはい、悪かったって。んじゃ、帽子屋、アリス」

一呼吸置き、チェシャ猫は狂った笑みを浮かべながら言い放つ。

「ゲームをしようか」

Ｔａｇ　～鬼ごっこ～（前書き）

←あらすじ
チェシャ猫からの招待を受け、道案内をしてほしいならゲームをして勝ったら、という事に。勝ったら道案内と白ウサギの開放。負けたらアリスの首。勝つのは、どっち？

Ｔａｇ　～鬼ごっこ～

風が、通り過ぎた。
アリスの横を。
帽子屋の横を。
白ウサギの横を。
チェシャ猫の横を。
三月ウサギの横を。

「ゲーム・・・？」
「そっ。ゲーム。とっても簡単なゲーム。アリスが勝ったら道案内してあげる。俺が勝ったらアリスの首ね」
「説明しろ。馬鹿猫」

不機嫌な帽子屋。ずっとチェシャ猫を睨み付けている。まぁ、普段から不機嫌なように見えるのだが・・・。

「鬼ごっこ」

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

バァンっ！バァンっ！バァンっ！

何度も何度も、静寂な森に響き渡った銃声。
だが、決して呻き声や叫び声は聞こえてこない。

「アハハハハハハっアハハハハっ。そんなんじゃ俺は捕まえられないよ、帽子屋」
「大人しく当たって死ね、馬鹿猫」

「えー？俺が死んだら道案内出来ないよ？」

馬鹿にするように笑いながら、チェシャ猫は木から木へと移ってゆく。さすが猫。人とは思えない身のこなしで、帽子屋の銃弾から逃げている。

「ちょこまかと・・・！さっさと当たれ！」

怒りが頂点に達しているのだろう。いつも以上に不機嫌・・・な気がする。大声を上げる事事態が珍しい。

鬼ごっこ《ゲーム》が始まってから約5分。

チェシャ猫に言われたルールの通り、鬼ごっこをしている。

『ルールは、アリスか帽子屋のどっちか1人がゲームに参加して、俺を捕まえればいい。どう？簡単でしょ。で、余った方は、高みの見物でもしててよ。制限時間は三月ウサギの持ってる砂時計の砂が全部落ちたら、ね』

チェシャ猫は、武器なども使って良いという事で、帽子屋が参加する事になった。残されたアリスは、白ウサギ、三月ウサギと共に泉で見物。と、言ってもモニターなどの様子を見るための物がある訳では無いので、何がどうなっているのか判らない。

「なぁ」

ずっと無言だったが、アリスが口を開いた。

三月ウサギは、砂時計から目線をずらし、アリスを見やる。白ウサギは、少し体を震わせ、顔を伏せてしまった。

「白ウサギ。なんで、チェシャ猫(アイツ)の見方なんだ？お前が付くような奴じゃないだろ？」
「それは・・・僕の弱みを握られたから、かな」
「そうか」

遠くを見つめるかのように、アリスは夜空を見上げた。森の中にいるからか、星がよく見える。
すると、不思議と言わんばかりに白ウサギは首を傾げた。
「攻めないの？僕、アリスの仲間殺(ぼうしやさん)そうとしたのに・・・」
「攻めてどうなる。大体、お前俺達に危害を加えたか？何もしてないだろ。そんなに気にする事じゃない」

軽く白ウサギの頭に手を置き、笑う。小さな子供をあやすように。
顔を出来る限り伏せていた白ウサギは顔を上げ、アリスを見やる。
少しだけ、白いウサギ耳が揺れた。

どうして、アリスはこんなにも優しいのかな・・・？
アリスが、判んない・・・。
僕(じぶん)が判らない・・・。
僕は、どうしてチェシャ猫の見方？
それは――――・・・

Ｅｎｄ　ｔｉｍｅ　～終了の時間～（前書き）

こんにちは～。
時間の都合上、前書きはこれからカットします。
と、言っても殆どの人が前書きなんて見ていないと思うで！はい！
大丈夫だと思います・・・多分。

End time ～終了の時間～

鬼ごっこ。
こんな簡単な言葉では無い。
捕まえるために、殺す。捕まらないようにする為に、殺す。ただの殺し合いでしかない。鬼ごっこなんて言葉では、無い。
それが、この狂った世界(ワンダーランド)のお遊(ゲーム)び。

「ねぇねぇ！帽子屋。制限時間は後どれぐらいだと思う？」
身軽な体で銃弾(たま)を避けながらるチェシャ猫。それは、まるでお遊びのように。
「知るかっ。んなもん」
何を言われても動揺せず、拳銃の引き金を引き続ける帽子屋。正確に狙いを定めているものの、あと1歩でチェシャ猫に避けられる。そして、チェシャ猫のナイフが飛ぶ。
1丁じゃ無理か・・・。だったら・・・！
ナイフを避け、帽子屋は手馴れた手付きでもう1丁拳銃を取り出した。器用に銃弾を込め、発砲する。
「2丁拳銃かっ。だったら、俺も普通にナイフぐらい使ってもいいよねっ！」

チェシャ猫もナイフを取り出し、手と手の間にナイフを挟む。片手で計４本。両手で８本。それを、一気に飛ばす。勿論、狙いはきちんと定めて。
銃弾がチェシャ猫の頬を掠め、ナイフが帽子屋の肩を掠める。そんな小さな傷は気にする事無く、２人は戦い続ける。それはそれは、楽しそうに・・・。
だが、チェシャ猫が押され始めた。
ナイフの命中率も下がり、銃弾の掠り傷が増えていく。
やっぱり、ナイフじゃ駄目か・・・。仕方ないな。死ぬよりはマシか。
「ストップ！！！」
突然、チェシャ猫が大声で鬼ごっこを止めた。
銃声も、風を切るナイフの音も消え去った。
残るのは、静寂の森。
「多分、これ以上殺り続けても、怪我するだけじゃん？だから、俺の負けって事で」
負けたと示すようにチェシャ猫は両手を上げてみせる。
納得しないと言いたそうではあったが、帽子屋は拳銃を降ろした。
「楽しかったよ、帽子屋」
どうせ負けるつもりだったし。まぁ、いいか。本当はもっと長く遊んでたかったけど・・・。ま、いっか。
鬼ごっこ勝者、帽子屋。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

泉で勝負がつくのを待つアリス、白ウサギ、三月ウサギ。
すると、何かに反応するかのように、ピクリと三月ウサギのウサギ耳が動いた。

「勝負が、ついたな」
「え！？」
「どっちが勝ったんだ！？」

まだ、砂時計の砂は残っている。だが、どちらかが死んでいては勝敗が変わってくる。
ごくりと、唾を飲み込む音がした。

「帽子屋だ」

三月ウサギの言葉に安堵するアリスと、慌てる白ウサギ。

「チェシャ猫は！？チェシャ猫は死んでないよね！？」
「大丈夫だ。アイツが降参しただけだからな」

生きていると言う言葉に白ウサギは安堵を示す。

どうして、こんなにも心配しているんだ？

アリスには疑問が出てくるばかり。白ウサギはどうしてチェシャ猫の心配をする？従わなければいけないほどの弱みを握られたのなら、相手の心配はしないだろう。逆に思っていても普通だ。
なのに、どうして？

「こっちに向かってる。すぐに追いつくだろう」
「そうか・・・。よく考えたら、お前。なんでチェシャ猫と帽子屋の勝敗が判る？2人がこっちに向かっている事が判る？」
「スキルだ。三月ウサギのスキル。能力と言った方が早いかもな。説明は帽子屋に頼め。アイツも、スキルも持っているはずだ」

スキル、ねぇ・・・。

特に興味を示しはせず、アリスは空を見上げた。
もう、太陽が昇り始めている。
鬼ごっこ（ゲーム）終了の合図のように・・・。

Only proceed ～進むだけ～

「白ウサギっ」

どこからか、僕の名前を呼ぶ声がした。僕の、友達の声・・・。

「チェシャ猫。どうしたの？こんなに朝早く」

「三月ウサギの本を数枚破ったから逃亡中。捕まったらお説教だし」

へらへらと笑う友達（チェシャねこ）に、僕は思わず笑みが零れる。

いつもの空。

いつもの太陽。

いつもの景色。

いつもの友達。

これが続くと思っていた。だって、僕等友達だもん。

勝手に自分で思ってた。

友達の異変にも気付けずに・・・。

だから、壊れたんだ。

僕等の絆が。

僕の、世界が・・・。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

太陽が昇りきって、夜明けが終わった。
その時には、帽子屋とチェシャ猫と合流する事が出来た。・・・
三月ウサギの能力で。
帽子屋とチェシャ猫にはいたるところに切り傷がある。戦った後だ、普通の事だろう。

「んじゃ、俺が負けたから約束通り白ウサギの開放と道案内ね」
腕を伸ばしながら、チェシャ猫は白ウサギを見やる。
白ウサギはとっさに目線を逸らし、俯いた。何か、言いたそうだ。
「・・・白ウサギの開放は、お前に従わなくていいって話だよな？」
よけいな、お節介かもな・・・。
少し躊躇(ためら)いながらも、アリスはチェシャ猫に向かって口を開いた。
どうしても、自分が今言わないと後悔をしてしまいそうで・・・。
チェシャ猫は口をへの字に曲げ、「どういうこと」と聞いてきた。
普通の返答だろう。
「そのまんまの意味だ。つまり、白ウサギは自由って事だろ？」
「まぁ、そうだね」
なぜそんな事を聞くのか疑問に思ったようで、チェシャ猫は首を傾げた。
聞いていた白ウサギは顔を上げ、アリスを見つめる。言いたくても、言葉が出て来ないようだ。
「じゃあ、白ウサギはチェシャ猫の隣にいていいって事だ。友とし

て、な」
「なっ！？」
予想外の反応をしたチェシャ猫。強くアリスを睨み付け、今にも襲ってきそうな獣だ。・・・視線が、痛い。
「友・・・？」
「ふざけんなっ！何があったか知らない奴が口出しすんなっ！」
感情に任せ、言葉を吐く。チェシャ猫らしく、無い。嫌、これが本当のチェシャ猫の感情なのかもしれない。普段は嘘の仮面を被っているだけで・・・。
「じゃあ、言ってみろよ」
「はぁ！？」
「俺は何も知らない。だから、言ってみろよ。そうすれば何も言わない」
「っ・・・」
言い返せない。
言葉に詰まり、チェシャ猫は黙り込んでしまった。
どうして？
なんで？
コイツには関係無い。
なぜ、知りたがる。
アリスが判らない。
色々な言葉の疑問がチェシャ猫の頭に渦巻く。
「・・・アリス。今は、聞かないで」

そんなチェシャ猫を悟ったあのように、白ウサギが口を開いた。

「白ウサギ・・・」

「今は、聞かないでほしいんだ。チェシャ猫も、僕も・・・そう思ってる」

辛い表情で、悲しい表情で白ウサギは言った。

さすがにアリスも聞ける訳無く、黙り込んだ。聞きたくても、聞いてはいけない。

白ウサギとチェシャ猫の間に何が・・・あったんだ・・・？

「アリス、馬鹿猫。話は終わったか？」

「帽子屋・・・。・・・ああ、話は終わった。チェシャ猫、さっさと道案内しろ」

「判った」

疑問を抱えたまま、アリスは進む。

芋虫に会う為に。

黒ウサギを殺す為に。

自分の居場所の為に。

進むだけ。

「どう？アリス達の様子は？」

太陽が上りきって、朝の涼しい風が吹くバルコニー。

少女の黒髪が靡く。

『アリスは順調に進んでいますよ。まぁ、芋虫のところでどうなるかは判りませんが』

どこからともなく聞こえてくる感情の無い声。

少女はその声に耳を傾け、目を閉じる。何かを、感じるかのように。

「チェシャ猫は、どうしてる？」

『珍しく、アリスに負けたので、しばらくは不機嫌でしょう。今は道案内をしているところだと思います』

「へぇ」

興味を持ったようで、少女は楽しそうに口を歪ませた。（微笑んだ）

『それと――――』

「！！　そう・・・なの。・・・これからも、監視をよろしく。三月ウサギ」

『はい、ハートの女王（イエス・マイ・ロード）』

声は消え、風の音だけが残った。

女王はゆっくりと目を開け、小さく笑った。狂った笑みで。

アリス・・・。
貴方は、真実を知る事が出来る・・・？
真実を知った時、貴方は・・・。
「期待しているわ・・・。アリス」
静かなる朝。
女王は笑う。

『それと、黒ウサギも動き出しました』

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

サク、サク、サク、・・・

一定のリズムで芝生を踏む音がする。
芋虫の下へ向かう、アリス、帽子屋、白ウサギ、チェシャ猫。途中まで三月ウサギはいたはずなのだが、いつの間にかどこかへ行ってしまった。
初めのうちはアリスは気にしていたものの、チェシャ猫に「いつもの事」と言われ、深く考えないようにした。
いつも、知らぬ内にどこかへ行っているのだろうか？
それを、不審には思わないのだろうか？
「・・・着いた」
ぽつりとチェシャ猫が呟き、足を止めた。

アリス、帽子屋、白ウサギも足を止め、目の前にある〝ゾレ?を見る。
人がぎりぎり入って出られなくなるような隙間しか無い岩の前。周りにあるのはあるのは木か草か・・・。家らしきものは無い。

「・・・ふざけてんのか?」
「ふざけてなんかないさ。ここが、芋虫の家・・・と言うか隠れ家のが合ってるかも。とにかく、この岩の隙間を通ればいいんだよ」
「はぁ?通れる訳が」「じゃあ、俺は道案内だけだから。後は自分で考えてよ」

一度ため息を付き、チェシャ猫は引き止める間も無く跳躍をしてどこかへ行ってしまった。

「チェシャ猫・・・」

チェシャ猫が去った方向を見つめ続ける白ウサギ。

「・・・白ウサギ。行きたいなら行ってもいいんだぞ」
「・・・うん。でも、今は一緒にいない方がいいんだ。アリスと一緒にいるよ」

いつもの調子に戻ったようだ。作り笑いではあるが、ある程度は戻っている。
安堵し、アリスはつられて小さく微笑む。・・・今は、心配しなくても大丈夫なようだ。

「・・・で。芋虫のところへ行くのにはどうすればいいんだ?」
「簡単だよ。呪文を唱えるだけ。開け、ゴマっ!みたいな」
「で、その呪文って?」

少し、嫌な予感がした。

「嫌いな人の事を大好きって言えばいいんだよ。名前付きでね。簡単でしょ？」

白ウサギの言葉に、アリスは自分の予感があたっていたと思う。

ああ、これは難題だな・・・帽子屋にとって。

子供っぽい簡単な呪文・・・普通の人は。だが、プライドの高すぎる帽子屋が白ウサギやチェシャ猫やヤマネの事を大好きなんて言える訳が無い。と言うか言ったら言ったで・・・アレだな。うん。

その事を判っている上で、白ウサギはニコニコと笑顔で「入る人全員ね」と付け足してきた。・・・余計な付け足しだ。

「あ、でも。アリスはやらなくていいんだよ。帽子屋さんと、僕だけね」

「帽子屋。お前」

バァンっ！

アリスの言葉を遮るように、銃声が響いた。帽子屋が撃ったのだ。銃弾はアリスの横を通り、背後の木へと当たった。ちゃんと銃弾が埋め込まれている。数センチずれれば、アリスは死んでいた事だろう。

「帽子屋っ！当たったらどうするんだよ！？」

「クソウサギと二人で行け。俺は絶対に行かない」

行かないじゃ無くて行けないだろうがぁぁぁぁ！！！！！

言いたい言葉をぐっと堪え、アリスは不機嫌な帽子屋見る。絶対にこの場から動かないと行った様子だ。

これは、やっぱり最悪の難題だな・・・帽子屋にとって。

Hatter asshole ～帽子屋の嫌いな人～

真っ暗な部屋。
部屋の中心には椅子があり、その椅子に少女が座っている。
座っている少女は微動だにしない。
ただ、動かぬ人形のように座っている。
そんな少女の頬に伸びた、手。

「おはよう・・・」

動かぬ少女に手を伸ばした少女の、声。

「今日は、空が綺麗だよ。いつもより青いんだ」

たとえ返答がこなくとも、少女は続ける。

「それと、花が綺麗に咲いてるよ。今度は花を摘んでくるね。沢山、沢山持ってくるから」

少女の声は、震えていた。

少女の手は、震えていた。

ぽつりと、少女の膝に落ちた、水。

「だから、早く目を覚まして・・・」

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

岩の前、芋虫の家の前で、どれだけ時間が経っただろう。もしかしたら、全然時間は経過していないのかもしれない。だが、アリスには長く感じた。彼の頑固さによって。

「帽子屋さ～ん。早く言いなよ～。1人でいいんだからさ～」

「嫌だ」

ずっとこれの繰り返し。

芋虫の家の扉を開け、入る為には、嫌いな人を大好きだと言わなければならない。子供っぽ過ぎる簡単な事。だからこそ、それは、帽子屋にとって最悪な事。プライドの高い奴なら、誰でもそうだ。簡単なようで、難しい。

昔は、クイズなどの難題だったらしいが、数年前に変わったらしい。プライドの高い奴が、どんな風に言うのか。と言う芋虫の〝悪趣味実験〟から始まった・・・と言う事のようだ。

「はぁ・・・。ってか、やっぱり俺と白ウサギで行けばいいんじゃないのか？」

「無理」

「なんで？」

「帽子屋と一緒に来た者は帽子屋が言うまで入れないって事になっているから。あ、これ最近芋虫が国中に回した手紙。嫌、ホントあの時は爆笑しちゃった」

芋虫は、相当な悪趣味野郎かよっ！

いつまでこんな状態が続くのか。アリスはごろんと寝転がり、空を見上げた。

青い青い空。
しばらくボーっと空を眺めている、と
「ど、い、て、く、だ、さ、いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！
！」
叫びながら、人が落ちてきた。
勿論、避けられる訳無く、そのままアリスの体に直撃。ゲームで言うと、一撃必殺のようだ。
「うおぉぉぉ！！！？？」
一瞬意識が飛んだかもしれない。
なんとか意識を保ち、アリスは自分の上に落ちてきた人も睨み付ける。
文句の一つでも言ってやろうと、した・・・が。言葉を失った。
落ちてきた人の姿を見て。
「す、すみませんっ。本当にすみませんっ」
いそいそとアリスの上から降りながら、落ちてきた人は何度も謝罪する。
白ウサギも落ちてきた人に目を奪われていたようで、やっと我に返った。
「ア、アリス、大丈夫っ！？」
「あ、ああ・・・。大丈夫だ」
落ちてきた人を見ると、また目を奪われる。
銀色の美しい長髪に深い海色の目。整った顔立ち。細身の体格。

それに合うように、格好は提灯袖の白いシンプルなワンピース。靴は白いパンプス。全体的に白い女性。だが、その白さがとても美しく、人では無いかの・・・嫌、人では無いだろう。お決まりの獣耳と尾。では無く、角と尾。鬼のような角では無く、一角獣の角。尾は、馬だ。

「あの、大丈夫ですか・・・？も、もしかして、どこか痛いところがありますか！？」
「えと、大丈夫・・・です」
「良かったー」

微笑む表情がまた、なんとも美しく可愛らしい。全ての異性を虜にしてもおかしくはなさそうだ。
だが、この場で違うのが1人。

「おい、一角獣（ユニコーン）。なんでお前が空から降ってくる」
「帽子屋様！？なんでここに・・・」

帽子屋・・・様？

帽子屋に様を付ける事を不思議に思いながら、アリス取り合えず口出しをする事をやめておいた。

「俺が質問をしている。それと、俺がここにいる事にお前は関係無い」
「えと・・・女王様に、処理してこいと言われて・・・」
「処理？」
「アリスは知らなくていい」

あっさりと帽子屋ははぐらかした。知らなくていいと言われると

余計に知りたくなる。

「・・・帽子屋様」

ぽつりと帽子屋の名を呟いたかと思うと、ユニコーンは帽子屋に微笑みながら手紙を差し出した。

帽子屋は無言で受け取り、白ウサギあアリスに見えぬよう、中身を確認していく。

一瞬目を見開いたかと思うと、すぐに手紙をしまい、ユニコーンを睨み付ける。それに対して、ユニコーンは・・・笑顔。

「では、私はそろそろ失礼します。本当に、すみません」

一礼し、足を進めようとした。が、

「待て。お前は、手紙(これ)を届けるためにここに来たのか？」

帽子屋の言葉で足を止めた。振り返らず、背を向けたまま、微笑むユニコーン。

「私は、偶然ですよ。この手紙も女王様に、もしも帽子屋様に会ったら渡してほしいと頼まれただけですから。では、失礼します」

風のごとく、ユニコーンはすぐに消えてしまった。

消える前にいた場所を、帽子屋はじっと見つめている。

「帽子屋。さっきのユニコーンって、何だ？」

「・・・お前には、関係無い」

「え～！教えてよ、帽子屋さん」

「チッ。・・・Ｉｏ，ｌａ ｒｅｇｉｎａ ｅ ｕｎｉｃｏｒｎ

ｏ　ａｍｏｒｅ」

突然、帽子屋が呟いたと言っていいほどに、小さい声で言った。何かを。

だが、アリスと白ウサギは何を言ったか判らない。２人が疑問に思っていると、

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

岩の開く音がした。さっきの帽子屋の呟きが、きっと呪文だったのだろう。

「ちょっ！帽子屋さんなんて言ったの！？」

帽子屋は無視をして、すたすたと芋虫の家へと入っていく。

アリスと白ウサギも帽子屋に続き、入っていった。

『Ｉｏ，　ｌａ　ｒｅｇｉｎａ　ｅ　ｕｎｉｃｏｒｎｏ　ａｍｏｒｅ』

俺は、女王とユニコーンが大好きだ。

Welcome to the Dream ～夢の世界へようこそ～

「ここは・・・」
「よく来たのぅ。アリス」

本と紙束が散乱した部屋。その中心には女性が本を読みながら座っている。
薄緑色の髪に銀色の目。細身の印象なのだが、こいつと戦ったら負けそうと思わせる何かがあった。格好は、レースがあしらわれたマキシ丈ワンピース。頭には薄い黄緑色の腰まで長さのあるベール。靴は緑色のパンプス。全体的に緑。葉緑体かと思うほどに。だが、それはそれで別として、女性には普通と比べて綺麗だ。ユニコーンとまではいかないが、やはりそれなりに綺麗だ。
アリス、白ウサギ、帽子屋は芋虫の家の中へと入り、今となっている。

「お前が、芋虫か？」
「そうだ。今回のアリスは前のアリスよりかは、可愛げがありそうだのぉ」

くすくすと小さく笑いながら、女性…芋虫はすぐ横にあった水タバコを吸い始めた。甘ったるい香りの煙が、部屋に充満する。
帽子屋以外は表情を歪め、鼻と口を手で塞いだ。

「くくくくっ・・・。やはりこの香りは堪えるか？」
「っ・・・」
「汝等（うぬら）の知りたい情報は、黒ウサギの居場所だろう？」

不気味な笑みを浮かべながら、芋虫は煙を吐く。さらに、部屋が甘ったるくなる。

「早く教えろ」

「待て、そう焦るでない。少し疲れただろう、良き夢を見るが良い。我からの、プレゼントだ」

もう一度芋虫が煙を吐き出した。

すると、目の前の景色が揺らぎ、意識が遠のいでいく・・・。

アリス、白ウサギ、帽子屋・・・全員その場で倒れてしまった。

それからは、もう何も感じない。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

『帽子屋さん。貴方はとっても優しいのね・・・』

声が、アイツの声が響く。

止めろ。俺、は、思い出したく、ない・・・。

アイツの事は、思い出したくない・・・。

『また、ここに来てくれる・・・？私、帽子屋さんと一緒にいる時間が、楽しいの』

止めろ。

どうして、アイツはいつも俺を苦しめる。

アイツの声が

アイツの目が

アイツの口が
アイツの手が
アイツの全てが・・・

愛おしい。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

『白ウサギっ』

ああ、彼が僕を呼んでる。
待って。待って。
そんなに早く走らないで。

『ほら、置いてくよ』

お願い、待って。
足が上手く動かないんだ。

君の下へ行きたいんだ。

君の下へ歩きたいんだ。

君の下へ走りたいんだ。

『ほら・・・。早く』

行かないで。行かないで。

置いて行かないで。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

『アリス』

誰、だ？

『私のところへ来て』

・・・？

どうして？

『貴方は黒ウサギと私を殺すの』

殺す・・・？

どうして？

なんで？

判らない。

わからない。

ワカラナイ。

『居場所・・・ほしいんでしょ？』

居場所・・・。

『私を殺して・・・居場所を手に入れて。それが、貴方の幸せ・・・』

誰だ？

どうして赤の他人がそんな事を言う？

お前は、誰だ？

The Mad Hatter Dreams ～帽子屋の夢～

「帽子屋様。おはようございます」

俺に話しかけてくる召使達。はっきり言うと、ウザイ。

「ああ・・・」

俺は、女王のお墨付き、と召使達に思われている。実際、それは間違っている。

女王にとって、俺はただの操り人形（マリオネット）。糸を引きちぎられるような事があれば、女王は躊躇（ちゅうちょ）無く、俺を殺すだろう。女王のお墨付きなんて者がこの世に存在しているのは笑える話だ。

そして、今日。俺は女王に呼ばれた。どうせ、くだらない話だろう。

「帽子屋。公爵夫人に、薔薇の花を届けてほしいの」

「薔薇？なぜですか？」

そもそも、なぜ俺が届け物などしなくてはいけないんだ・・・。

「公爵夫人には、お世話になったの。だから、貴方が薔薇を届けてほしいの」

「・・・承知しました」

豪邸。
公爵夫人は、裕福な家庭と言うルールがある。そのルールに従って、公爵夫人の家は豪邸と決まっている。

「こんにちは、帽子屋さん」
「お初目にかかります、公爵夫人」

コイツが、公爵夫人か・・・。

外見は上の中。特に興味は無いが。
今はベットで上半身を起こしている。病気か何かだろうか？

「いいのよ。そんなに堅苦しくしなくって」
「じゃあ、言葉に甘えさせてもらうとする」
「ふふっ」

微笑む公爵夫人の姿は、どこか儚い。・・・嫌、公爵夫人自体が壊れ物のガラスのようだった。触れたら全てが壊れてしまうかと思うほどに・・・。

「アンタは、どこか悪いのか？」
「まぁ、足がちょっとだけ」
「そうか」

どうでもよかった。
普段の俺ならそう思っていたことだろう。
だが、今は違った。
『公爵夫人を守りたい』
なぜか、そう思った。今思えば、笑える話だ。

公爵夫人と出会って月日が経った。
俺は、よく公爵夫人の家へいくようになっていた。女王の命令が無くても、自分から会いに行く事が多い。
ただ、公爵夫人（かのじょ）の傍にいる事が、とても・・・

嬉しかった。

「帽子屋さん。貴方はこの国をどう思いますか？」
「・・・そういうお前はどう思ってるんだ」
「私は、狂った場所だと思ってます」

それは、合っている。
不思議の国（ワンダーランド）にいる人間自体が狂っている為に、気付かない者もいるが、確かに狂っている場所だ。

「でも、ここは私の居場所です。それに、貴方にも会えますから。私は不思議の国（ワンダーランド）が、嫌いではありません」
「・・・そうか」

嬉しかった。
どうしてこう思うのか判らずに。俺は、ただ思い続ける。

そして、事件が起こった。
いつものように、公爵夫人の家へと向かった。
だが、公爵夫人は・・・

「すみません。公爵夫人は・・・・・・・・・・・・お亡くなりになられました」

時が、止まった。

どうして？

なぜ？

公爵夫人（かのじょ）は死んだ？

ああ、嫌だ。

どうしてこんなにも嫌になる？

判らない。

憎い。

憎い。

憎い。

誰が？

誰が？

誰が？

苦しい。

どうしてアイツは俺を苦しめる？

憎む相手が判らない。

ああ・・・・

？

俺は誰が憎いんだ

Dream of White Rabbit ～白ウサギの夢～

「始めまして、君。名前は？」

僕に話しかけてきた、笑顔の人。

「僕、は・・・白ウサギ」

「白ウサギ、ね。俺はチェシャ猫。よろしく、白ウサギ」

チェシャ猫の差し出す手が、温かかった。

一緒にいたい。

そう思って、僕はチェシャ猫（かれ）の手を取った。

「白ウサギっ！」

「どうしたの？もしかして、また帽子屋さん怒らせちゃった？」

「あっちが勝手に怒ってるんだよ～」

バァン！バァン！バァン！

銃弾が、僕の横を通り抜けた。

当たっても死なないと判っていても、やっぱり痛いのはいやだなぁ。

「よしっ！三月ウサギのところに逃げるぞっ！」

「おー！」

銃弾を避けながら、迷いの森へと走っていく。

「邪魔しに来たよ～、三月ウサギ」
「おじゃまし ま～す」

三月ウサギは、本を読んでいた。
いつも本を持っていて、暇になると読んでる。ホント、本好きだあ・・・。

「また、帽子屋を怒らせたのか？」

本に目線を落としたまま、三月ウサギは話す。僕だったら本に集中して絶対に出来ない。

「白ウサギが」
「僕じゃないしっ！」
「え～。だってさぁ、帽子屋の拳銃に少し悪戯(いたずら)しただけだよ」

チェシャ猫はよく、色々な人に悪戯をする。
その悪戯によって、死んだ人もいた。それでも、チェシャ猫は悪戯を止めない。寧ろ、人が死んだ事を喜んでいる。そう、チェシャ猫(か)は狂(れ)っている。不思議の国(ワンダーランド)の住人はだいたいそうだと言うが、チェシャ猫はそれ以上に狂っているのかもしれない。
人が死ぬ事を喜び、簡単に人の運命を捻じ曲げる。
自分の何かを埋めるように。
僕の事も、いつかは悪戯で殺すのだろうか？

「白ウサギ？どうしたの？」
「なんでもないよ。で、どんな悪戯をしたの？」

「アハハハっ。それは、秘密」
「え〜」
笑いながら、僕の質問をあっさりとはぐらかす。
チェシャ猫にとって僕は何？
チェシャ猫にとって僕は誰？
チェシャ猫にとって僕は友？

ある日。
僕は、森の中である人に出会った。
「・・・？　誰？」
「白いウサギ耳・・・。白ウサギ、ですか？」
「え？なんで僕の名前・・・」
目の前にいる人は誰？
どうして僕を知っているの？
「私、公爵夫人と申します。良ければ、一緒にお茶でもしませんか？」
「別に、いいけど」
「では、行きましょう」
公爵夫人と会って、僕はチェシャ猫のように温かい人だと思った。
僕にとって、チェシャ猫とは違う。お母さんのような温かさを感じ

たんだ・・・。
チェシャ猫達にも公爵夫人の事を紹介して、４人でいる事が楽しかった。
そう、楽しかった・・・。

いつもの朝が訪れた。
晴天の朝は、とても気分がいい。
でも、この日が僕にとって最悪の日になるのは、数時間後・・・。

「チェシャ猫・・・？」
「ん？どうしたの？白ウサギ」

いつもと変わらぬ、笑み。
いつもと変わらぬ、チェシャ猫。
いつもと変わらぬ、悪戯。

「どうして・・・？」
「え？だって、この人嫌いだから。白ウサギにひっついて・・・」

チェシャ猫は、本当はいつもの笑みとは違っていた。でも、僕にはその違いが判らない。
目の前で倒れている公爵夫人に気を取られて・・・。

「どうして、倒れてるの？」
「俺が、足を傷つけたから。白ウサギに近付く足を、傷つけたから。白ウサギが、悪いんだよ？コイツに構ってばっかりで、俺には全然・・・」
「僕の所為なら僕を殺せばいいじゃないか！」

判らない。
わからない。
ワカラナイ。
どうしてチェシャ猫(かれ)は公爵夫人(あのひと)を傷つけたの？
止めて。
やめて
ヤメテ。

僕は、気付けなかった。
チェシャ猫(かれ)が悲しんでいる事を。
自分の事で、いっぱいいっぱいで・・・

スベテガワカラナイ。

Alice's Dream ～アリスの夢～

―アリス―

それが、俺の名前。
けど・・・俺はアリスだ。と自分で名乗っていいのかが判らない。
俺は、アリスの名前しか知らなかったから。だから、アリス。
他人に言われたからとかは関係ない。知らなかったから・・・。

アリスは誰の名前？

アリスは誰の居場所？

アリスは誰のもの？

俺はアリス？

判らない。

「ねぇねぇ、お母さん。いつものお話して」
「いいわよ。でも、これを聞いたらちゃんと寝るのよ？」
「はーい」

これはいつかのお話。
病弱な少女が、死ぬ前にあるお願いをしました。

「どうか、友達をください・・・」

それを見ていた神様は、少女に黒いウサギのお人形を差し上げました。

「これは、君の願い事を叶えるものだよ」

少女は、黒いウサギの人形に、お願いをしました。

「お友達になってください」

すると、人形は形を変化させ、黒いウサギの耳と尾をつけた少女へと変わりました。

「僕は黒ウサギ。君のお友達」

黒ウサギと少女はすぐに仲良くなりました。
でも、少女は人なのです。
命は永遠ではありません。
ある日、少女は深い眠りにつきました。
黒ウサギは、死と言うものが判りません。
昨日まで、一緒に笑っていた少女が死んだのです。

「僕は起きているのに、どうして君は眠っているの？」

黒ウサギには、ぽっかりと心に穴が空いた気持ちでした。
それから多くの時が過ぎました。
少女は変わらぬ目覚めません。

「僕は、君の為に何が出来る？」

何をしたらいいのか判りません。
だから、黒ウサギは考えました。

君が目覚めるように、世界を作ろう。君の為の、世界。

それからまた多くの時が過ぎました。
黒ウサギは少女を連れて、少女だけの世界へと向かいました。
不思議の国へ。

最初は2人だけの世界だった不思議の国に、人がやってきました。
人は、傷を持っていました。
黒ウサギのように、心の傷を。
黒ウサギは何か出来ないかと、人に居場所をあげました。不思議の国と言う居場所です。
時が経つにつれ、人はどんどん増えました。
そして、やって来た人達は不思議の国に最初からいた黒ウサギの存在を、忘れていったのです。
その所為で、不思議の国の世界は〝歪み〟始めました。物語が進まないのです。
不思議の国の住人達は、黒ウサギがいるから歪んだと決め付け、黒ウサギを排除する事にしました。　けれど、自分の手を汚す事を住人は拒みます。
だから、次。この国にやって来た人を、アリスと名づけ、アリスに黒ウサギを殺させようと考えました。

そして、アリスは物語を進める人形（ドール）として、歓迎されるのです・・・。

『アリス』

誰かが、アリスを呼んでいる・・・。
ああ、今は俺がアリスだったな。

『声に、惑わされないで』

声・・・？

『私は・・・ここよ』

どこだ？
お前はどこにいる？

『お願い・・・。私を見つけて』

お前は、誰だ？

お前は、どこだ？

お前は、何だ？

『私、は・・・』

ああ、聞こえない。

お前の声が聞こえない。

A quiet darkness begins to move ～静かな

「そろそろ、か」

水タバコを吸いながら、芋虫は呟いた。

部屋は、甘ったるい香りで埋め尽くされており、感覚を狂わしているようだった。実際、芋虫の吸っている水タバコの煙の香りに耐えられない者は、失神してもおかしくは無い。

そして、その香りに耐え切れず、倒れた者が3人。

アリス。帽子屋。白ウサギ。

彼等はどんな夢を見ているのでしょうか？

「眠りネズミ（ヤマネ）」

「はい」

どこからともなく、少女が現れた。

少し内側にはねた栗色の髪に鮮やかなオレンジ色の瞳。まだ、幼いようで、白ウサギよりも童顔。格好は、胸にリボンが付いたTシャツに、舌はベージュのハーフパンツ。Tシャツの上には、薄茶色のケープ。靴は、ブーツを履いている。まさに、可愛らしい少女。だが、お決まりの・・・獣耳と尾。丸い耳と、細長い尾。どうやら、ネズミのようだ。

「ヤマネ。汝は、アリスを連れて黒ウサギの場所へと案内しなさい。後の始末は女王に頼んでおいた」

「承知しました」

少女は、アリスを軽々と持ち上げると、一瞬の内にどこかへ去っていってしまった。

残されたのは、芋虫と帽子屋と白ウサギ。

「くくくっ・・・。これからどうなるか、楽しみだのぅ。アリス」

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

「んぁ・・・？」

「起きましたか、アリス」

何か、頭に柔らかい感触が・・・。

目に映るもののピントが合わない。

誰かが、目の前にいるのが判っても、どんな人物かが判らない。

「・・・あ」

やっとピントが合ってきた。そして、気付いた。

目の前にいる少女が、自分に膝枕をしているという事に。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？？」

なぜ？どうして？

急いで少女から離れ、アリスは状況を確認すべく、周りのものに目を移していく。

周りにあるのは木、木、木、木、木・・・それと、少女。

訳が判らず、混乱するアリスに、少女は黒い刃を突きつけた。

「静かにしてください」

「っ・・・」

冷たい汗が流れた。少女は、どこからともなく取り出した黒いナイフをアリスの首に突きつけている。この国（ワンダーランド）の住人は皆武器を所持しているのだろうか。

「では、まず自己紹介します」

少女は、ナイフをケープの中にしまい、ペコリと一礼した。

「先程はすみません。小生は眠りネズミこと、ヤマネです。ちなみに、男です」

「・・・ハァ！？男！？お前が！？」

「はい。この服は芋虫の趣味です」

服の問題じゃねぇぇぇぇ！！！顔だ！顔！つか、芋虫の趣味かよ！

無表情とはいえ、どこからどう見ても少女だ。これが少年とは思いにくい。嫌、思えないに近い。

「では、行きましょう。黒ウサギの下へ」

無理矢理手を引っ張られ、アリスは立ち上がった。

「ちょっ・・・」

止めようとするが、ヤマネは止まらない。アリスの手を引いたまま、足を進めていく。振り解こうとしても、力が強くて解けない。こんなに小さな少女・・・じゃなくて、少年のどこにこんな馬鹿力があるのだろうか。

逃げようとすれば、するほどにヤマネの力は強くなる。

「小生は案内を任されました。アリスを案内しなくてはいけません」
「離・・・」『いいのよ、これで』
「！？」

突然、頭の中で、声がした。
自分では無い。誰かの、声。

『だって、貴方は私を殺すの。勿論、黒ウサギも』

なんだよ・・・。なんなんだよ！
お前は、誰だよ！

「くっ・・・！」

その場で膝を付いた。
ヤマネもさすがに引きずる事は出来ず、足を止めた。

「アリス？」

だが、ヤマネの声は聞こえていないようで、アリスはもがくように倒れこんだ。

『ねぇ・・・。居場所、ほしいんでしょ？私もほしいの』
「居、場、所・・・？」
『私を殺して。そうすれば、貴方も私も幸せになれるのよ・・・』

五月蝿い、五月蝿い、五月蝿い！！！
俺は・・・！
ただ、居場所がほしくて・・・！

「誰も・・・殺したくない・・・」

目から冷たい水が零れ落ちた。止まらない、流れ続ける。

誰も殺したくは無い。

でも、それでしか俺は居場所を手に入れられないから・・・。

だから・・・。

殺さなくてはいけない。

殺す

消(ころ)す

壊(こわ)す

あの時と、同じ――――・・・

俺が、殺す。

He was burdened with sin ～彼は罪を背負う～

―また、1人になった―

アリスを芋虫の居場所へと案内してから一日。
太陽が落ち始めている。
三月ウサギが戻ってくる様子は無い。1人だ。

「つまんない・・・」

この国で、チェシャ猫は自由。
ルールに縛られる必要は無い。この国で唯一チェシャ猫は何も縛られないと言う束縛を持った人物。チェシャ猫は、1人。ルールに縛られた人物と違って、ルールに縛られないからこそ、1人。

「暇だな～～～」
「こんにちは、猫さん」

突然現れた、角を生やした女性。全ての異性を虜にしてしまいそうな美貌を持ち合わせている。
だが、チェシャ猫にはそんな感情が無く、今、目の前にる女性が自分を楽しませてくれるかどうかで対応が変わる。だが、まずは笑顔。

「君誰？」
「一角獣（ユニコーン）と申します」

丁寧に挨拶をすると、ユニコーンは微笑みを浮かべる。

「一応、覚えとくよ。まぁ、俺のところに来たって事は、俺の名前ぐらい判るよね？」
「ええ、勿論。チェシャ猫さん」
「で、俺に何の用？」
「簡単な事です。深くは考えないで下さい」

ユニコーンはチェシャ猫に手を伸ばし、微笑みを顔に貼り付けたまま、口を開く。

「私と手を組みませんか？」

一瞬、時が止まったように感じた。
手を組む。
何の為？

「なんで、俺が君と手を組まなきゃなんないの？」
「私、帽子屋様が好きなんです」
「それに、俺と何の関係があるの？」
「協力してもらいたいのです」

何、馬鹿な事言ってるんだ・・・。

笑顔は消さぬまま、チェシャ猫は「へぇ」と興味深げに言う。実際、あまり興味は無かったが、自分の所為で他の人に・・・特に〝友達？に迷惑がかかるのが嫌だった。

「ふふっ。覚えてますか？1年前の事」

突然、話題が1年前の出来事になり、思い出してしまった。

「何か、関係があるの？手を組む事と」

表情が、少し引きつってしまった。もう、あの事を思い出してしまった時点でユニコーン（こいつ）を殺しても良かったが、あえて止めておいた。話を聞いておいた方がいいと判断したのだ。

「覚えてますよね？公爵夫人の事」

「っ・・・。で、何？」

「私、これでも女王の召使なんです。私の情報網で、少し調べました。そうしたら、面白い事を見つけましてね・・・。チェシャ猫さん。公爵夫人の足を傷つけたのは貴方でしょう？」

どこまで知ってるんだ、コイツ・・・。

さすがに笑顔が消え、チェシャ猫は睨み付けながら腰にあるナイフの感触を確かめた。ヒンヤリとナイフは冷たい。その冷たさで冷静を取り戻し、チェシャ猫は笑顔を顔に貼り付ける。

「そうだけど、何？」

「貴方はもう知っているでしょうけど、公爵夫人は何者かによって殺されました。その何者かって言うのが私なんですよ」

「！？」

「ふふっ。驚いてますね」

普通、不思議の国（ワンダーランド）では勝手に人は殺せない。女王の命令が無いかぎり、たとえ、ナイフや拳銃で心臓を貫いても、死にはしない。ルールの一つだ。だが、それもチェシャ猫には関係無い。チェシャ猫につけられた傷は、癒えるのを待つしか無い。と言っても、治らない傷もある。

それなに、公爵夫人はなぜ死んだのか。
チェシャ猫が殺した訳では無い公爵夫人はどうして死んだ？
死んだと知らされた時は、チェシャ猫は寿命だったんだと自分に言い聞かせた。それで、自分を納得させていた。

「どうして殺せたかは言えません。あ、ちなみに私の単独行動なので、女王が命令した訳では無いんですよ？」
「そんな事どうでもいいからさ。早く、いいなよ。俺に何をしてほしいの？」
「貴方に――――を殺してほしいのです」

殺してほしい者の名前『――――』
どうして――――を殺さなくてはいけないのか。
――――は・・・――――は・・・

「帽子屋様の気を一番引いているのは――――なの。だから、殺して？」
「貴方も嫌いでしょう？白ウサギを奪っているのは今・・・――――よ？」

甘い悪魔の言葉が囁かれる。

っ・・・。――――は、俺のなんだっけ・・・？

「ねぇ、いい事だと思わない？」
「・・・俺は、そうは思えない」

ああ、――――が俺の何かなんてどうでもいいんだ。
俺は・・・

「？　どうして？」
「俺は、もう白ウサギが傷つくのを見たくないんだ。きっと白ウサギは―――が死んだら悲しむから」

正直の、笑顔。
きっと、今の自分はこれを望んでいる。
例え、―――が邪魔者でも、白ウサギが悲しまなければいい。
今はそう望んでる。これから先も・・・ずっと。

「そう・・・。本当は嫌だったのだけれど・・・。白ウサギは公爵夫人と仲が良かったようね。しかも、白ウサギは公爵夫人の死を知らないのでしょう。まだ生きていると思っているようですね。笑える話です。でも・・・私が真実を伝えたら、どうでしょう？きっと、白ウサギは苦しむでしょうね。ずっとずっと・・・。ね？私と・・・手を組みましょうよ」

真実。
白ウサギは真実を知れば、どうなる？
苦しむ？悲しむ？涙を流す？
判らない。
でも・・・
知ってほしくは、無い。
だから・・・
だから・・・

「・・・判った」

一筋の涙を流し、チェシャ猫はもう一度口を開く。

「・・・判ったよ」

ごめん。
俺の罪を許してくれとは言わないから・・・。
せめて、笑って？
君の悲しみは憎しみに変えて、俺に頂戴。
全部、全部。
俺が背負うから。

The Executioner ～死刑執行人～

優雅な一時。
少女達は、薔薇園お茶を楽しんでいた。
「それで、結局どうなったのかしら？チェシャ猫は」
「一角獣（ユニコーン）と手を組むようですよ」
紅茶を飲む少女と本を読みながらクッキーを食べる青年。青年の読む本にはクッキーの零れカスが全く落ちていない。
「そう・・・。それで、どう動くの？」
「・・・言わないといけません？」
「勿論」
笑顔で言う、少女…ハートの女王に対し、青年…三月ウサギはため息をつく。本から目線はずらさずに。
「これ言って女王様に動かれると、俺が監視役だってバレそうなんですけど」
「その時は自分で対処しなさい」
「無責任ですね。俺は、死刑執行人と違って女王の操り人形（マリオネット）じゃ無いんですよ？」
「・・・そうね。まぁ、手を組んだと言う事だけ判れば十分です。早く監視に戻りなさい」
「・・・はい。ハートの女王（マイ・ロード）」
三月ウサギは強風と共に消え去った。
女王は何事も無かったかのように、紅茶をまた飲み始める。

ユニコーンとチェシャ猫はどう動くのかしらね・・・。

お茶を楽しみながら、女王は笑う。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

重い目蓋(まぶた)を開き、ゆっくりと意識を取り戻していった。

完全に意識が戻った訳では無いが、ある程度の事が判るようになってきた。

「帽子屋・・・さん。起きてる・・・？」

「ああ・・・」

全身力が抜けていた所為で、上手く体が動かない。帽子屋と白ウサギ。

帽子屋は白ウサギより前に起きていたようで、無理をしながらも立っている。白ウサギの方はまだ起きたばかりで、上手く立てない産まれたての子羊のようだ。

「ははっ・・・。上手く動けないや・・・」

「そんな事よりも、芋虫はどこへ行った？」

眠る前にいた場所からは移動していない。だが、芋虫の姿が見当たらない。

まだ、部屋に香りは充満している。さっきまでこの部屋で水タバコを吸っていたのだろう。

「さぁ？帽子屋さんのが先に起きてたんでしょ？」

よろよろと立ち上がりながら、白ウサギは笑みを顔に貼り付ける。

「ああ。・・・ウサギ、お前レイピアはあるか？」

「うん、一応」

腰にあるレイピア。白ウサギ自身は人を殺す物では無く、ただその場凌ぎの物と思っている。誰も、殺したくは無い。例え甘い考えだとしても、自分が辛い思いをしても・・・。

「今から言う事を良く聞け。ここにアリスがいないって事は黒ウサギの場所に案内されていると考えた方がいい。アリスを殺す事は誰にも許されない。そこはいいが、俺達は恐らくここで始末される事になるだろう。女王の命令で動く、死刑執行人になっ！」

バァン！

銃声が響いた。部屋の柱に銃弾が食い込んでいる。

そして、柱の後ろから少女が出てきた。

「・・・よく、判りましたね」

長い銀髪に淡い青い右目と淡い赤い左目のオッドアイ。きしゃで病弱にも見えかねない痩せた体。格好はフリルがふんだんあしらわれた黒いゴスロリ（ゴシックロリータ）ワンピース。外見としては可愛らしいフランス人形。だが、片手には少女と同じぐらい・・・嫌、それ以上に大きい漆黒の大鎌を持っている。

「死刑執行人。女王の操り人形」

「ええ、私は人形です。今日は白ウサギを殺す為に来ました」

感情の見えない目と淡々とした口調。本当に心の無い人形のようだ。
大鎌を振り上げ、地面を蹴り上げる。少女…死刑執行人は白ウサギに向かって風のごとく刃を振り下ろす。白ウサギは早さに反応出来ず、当たると覚悟した・・・。が、

ギィィィィン!!!

刃と、黒い拳銃がぶつかる音がした。

「何を、するのですか。帽子屋様」
「帽子屋さん・・・?」

白ウサギは目を丸くし、唖然と帽子屋を見る。

「勘違い、するなよ。俺はアリスの為に動く。帽子屋はアリスが望むの事ならば、人を殺す事も許されるからな」
「・・・アリスは、今何を望んでいるのですか?」

即座に距離を取り、死刑執行人は目を細める。何かを確かめるかのように。

「今、アリスがここにいたら、クソウサギの死なんてものは望まないんだよっ」

バァン!バァン!バァン!

銃弾に素早く反応し、避ける為に大鎌を使って跳ね返そうとした。だが、進路を少し変えるだけで、死刑執行人の頬を掠め、肩を掠め、膝を掠めた。

赤黒い血が流れるように出てきた。その血を手で確認する。
「死刑執行の妨害人と判断します。これより、死刑囚を白ウサギ。帽子屋とし」「待って」
「・・・？」
「今狙ってるのは僕でしょ？帽子屋さんは関係無いよ。だから、僕が君を殺すよ」

レイピアを抜き、構える。
何か言おうと帽子屋は口を開こうとしたが、口を閉じた。
白ウサギの姿を見て。

「白ウサギの資料は確認しています。ですが、これは予想外ですね」
「ちゃんと、楽しませてよぉ？」

狂ってる。
今、白ウサギ（かのじょ）は狂ってる。
ニヤリと不気味に、怪しく口が裂けて見える程に狂おしく笑う。
本当に、目の前にいるのは白ウサギ？

「予想外でも、殺す事に変わりはありません」

改めて大鎌を構え、死刑執行人は動き出す。

死刑囚の心臓を貫く為。

死刑囚の鼓動を消す為。

死刑囚の息を止める為。

死刑執行人（かのじょ）は動く。

Pledge allegiance ～忠誠を誓う～

「アハハハハハハハハハハハハっ！アハハハハハハっ！アハハハハハハっ！」

狂いながら、舞う。

心臓を抉り取る勢いで、白ウサギはレイピアを死刑執行人に向かって突き刺す。それを、死刑執行人は体を反らし、宙返りをし、避ける。時には大鎌を、白ウサギに向かって振り下ろす。

ただの殺し合いでありながら・・・とても楽しそうに見える。

「クソウサギが・・・」

何が相手を殺すのが嫌、だ。

殺し合いの邪魔にならず、かと言って遠すぎず、帽子屋は丁度影響の受けない位置で、殺し合いを見ていた。いざとなれば、助太刀でもしようかと考えたが・・・それは必要ないと思っている。それでも、帽子屋は服の中にある拳銃に手を伸ばし、確認をする。ヒンヤリと冷たい拳銃の感触を。

「白ウサギ。貴方は資料と矛盾しています」

「資料ー？」

宙返りをし、白ウサギは死刑執行人から距離を取った。

「資料には、人を殺す事を嫌うと書かれていましたから」

「何ソレー？生物を殺すのは、楽しいよ！すっごくね！目玉を抉って、腕を切り落として、骨を折って、内臓を取り出して、心臓を抜

き取ってさぁ！最高じゃん！最高の芸術だよねぇ！」

クルッテル。

今の白ウサギを見れば、普通は思う言葉だろう。普段が普通ならば、なお更。

人を殺す事を楽しみ、

死を最高の芸術だと言う。

壊れたゼンマイ仕掛けの玩具だ。

「本当、貴方は狂っています」

「そう。別にそんな事どうでもいいよ。それよりさぁ、君が女王に従う理由（わけ）。僕知ってるんだよねぇ」

「？　どういう意味ですか」

悪魔で淡々とした口調で、動揺する様子は見せない。

「そのまんまの意味だよ。君の過去を知ってるだけだけ。ね？」

「・・・どう、して。知ってるんですか」

初めてと言ってもおかしくは無い。死刑執行人（かのじょ）が、動揺した。

大鎌を振り上げ、白ウサギぬ向かって走る。だが、それはあっさりと避けられた。真っ直ぐな攻撃の為、避けられるのは普通だろう。

「アハっ。怒っちゃった？ごめんねぇ？」

「五月蝿い、です」

記憶が蘇える。

封じていた記憶。

大切で、大事な・・・記憶。

ああ、でも・・・

思い出したくない。

・◇・◆・◇・◆・◇・◆・

私は、１０になる前に捨てられた。

生きていくのがやっと。

深い深い森の中に捨てられた所為で、町に行く事は叶わなかった。

１人で、生きていく。

森の生き物を殺して食べなければ、生きていけない。

殺さなくては、食べられる。食べられる前に、殺す。生きていく為に。

そして、そんな私の前に・・・

赤いドレスの女性が現れた。

『お主、強いのぅ。その強さ、ここで使うのは勿体無いのぉ』

血塗れの私に、恐れる事無く、女性は私に近付いてきた。

『・・・誰、ですか？』

『妾（わらわ）は、ハートの女王。国を治める者じゃ。お主の名は何と言う？』

『名前なんて・・・ありません』

女王は私に視線を合わせ、頬を撫でてくれた。なぜか、とても手が温かく感じた。

『それでは、不便じゃろう。どうじゃ、妾の下に来ぬか？』

『・・・女王様の・・・？』

首を少し傾げ、疑問に思う。

『ああ、そうじゃ。お主は今日から死刑執行人。だが・・・その名前はお主に似合わぬ。だから、もう一つ名前を上げよう』

笑みを浮かべ、女王は言う。

『キティ。キティじゃ。だが、キティと言う名は妾とお主の2人の時だけにな』

無言で頷いた。
嬉しかった。
居場所をくれた。
必要としてくれた。
だから・・・

私は貴方に忠誠を誓う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2994x/

Alice story　~本当のアリスは誰？~

2011年10月30日06時10分発行